

仙台文学館 ニュース

Sendai Literature Museum News

第四号



山形文学館

館長 井ノ口

林美美子の『放浪記』は、当時としては新しい、それまでになかったスタイルでした。彼女は、女給などさまざまな職業を転々としていきます。お客がくれば相手をしなさいといかないし、次の仕事を探すことで忙しい。時間がないので詩を書くしかない。落ちついて長いものは書けないのです。その時その時の思いつきをメモしていくんです。

また、女性が就ける職業は少なかった時代です。生きていかなければならないために、どんどん職業を変えていく。その放浪と遍歴の中で、そのときの職業やお客さんのことなどをひっくるめて、その日の感想をほとんど書いていく。書かれているのは断片です。一人の女性のさまざまな断片が重ねてある。もちろんそれは、「今日」は楽しかった」というような作文ではありませんよ(笑)。林美美子という女性の才能によって、詩の形にしたり、見事な観察文にしたりして書いている。それを並べて再構成して、新たに書き加えたり削ったりしながら書き上げた、その集大成が『放浪記』なんです。

林美美子の生き方自体が、新しい小説を生み出したのです。

講義「放浪記」から「め」までより

ことばとその周辺

第四回

仙台市で広く文学にかかわる活動を取り組んでいるグループを「仙台文学館」が紹介するコーナーです。

宮城県連句協会

互いに聞き合い、語り合って作り上げる 日本特有の文芸

「俳句が上手になりたい」と、連句を始めたのが五年前。句作の題材も広がり、今ではどちらも楽しいです」と、金子兜太門下で俳句に三十年打ち込んだ副会長の中村孝史さん。「俳句はキレ。個の文芸。自己完結の世界。それに対して連句は、つながりが身上」と語る。

五・七・五の長句と、七・七の短句を三六句付け合せて「歌仙」。十八句なら「半歌仙」。百句は「百韻」。四十四句で「世吉」、六十句で「源氏」。五、六名で組む「二座」を、座の要である「捌き」が式目という無数の約束事を踏まえて進行する連句は、まさに「座の文芸」だ。



「全然、古くささを感じない。現代の文化にはないからこそ、面白い」と語る雅号「阪」の菅原将治さん(右)。中央は狩野代表。

宮城県連句協会は、二〇〇〇年三月に行われた「みちのく松島連句大会」をきっかけに結成された。県内各地の連句の集まりが一堂に会したこの大会には、浅野史郎宮城県知事はじめ九十三名が参加。合同での活動も試みようという気



「花を持たせる」「首尾」「挙げ句」……連句に由来する言葉は多い。私たちの文化との深い関わりがうかがわれる。

運が起こった。日頃顔を合わせない他の連衆と詠み合うことは、とても刺激になるといえる。

この日は二十八名が出席。中高年の方に混じって、大学の講義で連句を知ったという大学生も。五つの座に分かれて、一句一句吟味し合いながら言葉を受け合っている。例えばこんなふうだ。

愚問をふくらませと望の月 康子
涙に映る君は案山下 阪
コスモスのひと片ふた片着せかける 文男

「連句は、現実という縦糸に座の横糸を織り込みながら三十六句に森羅万象・人生のすべてを詠むもの。前の句に意味と余情、余韻で幽かに連なり、互いに別世界へと誘われていく楽しみがあります」

代表の狩野さんは、見守るようなまなざしで急須を携え、座を回っていた。

●参加申し込み 問い合わせ先 電話(〇二二)二七・一〇〇五 (狩野康子さん)

●毎年夏の恒例企画「こども文学館 えほんのひろば」。今年も川端誠さんの原画展を開催しました。代表作「お化けの真夏日」に登場する一つ目小僧や三つ目小僧、砂かけばあなどのキャラクターが館内でお子様たちをお迎えしましたが、あまりの怖さで泣き出してしまった男の子が……。川端さんにはその話をしたところ、「泣き出すのは、感性が鋭い証拠。先が楽しみですよ」とのお言葉。楽しかったり、悲しかったり、怖かったり、本を通していろいろな体験をしていくのです。



●第三回詩のボクシング全国大会が七月十二日(土)に東京霞ヶ関のイイノホールで開催され、宮城代表の日野修さん(33)は、ベスト4に進出。準決勝では優勝者とあたって残念ながら敗退しましたが、朗読ボクサー十六人中、十三人が十代から三十代というなかで闘い、若い人とは違う自分の言葉」を再認したとのこと。お疲れさまでした。

●八月七日に開催した「朗読と音楽の調べ…七夕特集」で

学芸室日記

は、「ほしになったりゆうのきば」など、七夕や星にまつわるお話を、中国の古楽器とシンセサイザーの調べとともに味わっていただきました。今回は、二胡のほか新たに「揚琴」という楽器が登場。百三十五本の弦と竹の撥で奏でられる「たなばた」のメロディーは、二胡とはまた違った、柔らかな音色が印象的でした。



●「文学のある風景」で取材した伊坂さんは、何度か当館でも執筆されたことで、職員もそれらしいお姿をお見かけしておりました。以前、会社勤めの傍ら執筆していたころ、あまりの辛さに、「オーデユボンの折り」を最後に、応募するための作品を書くのはやめようと思ったそうです。「普通は、書きながら読み手の反応を想像するのですが、この時は、思いつき好きなように書きました。自分のためだけに書きたという意味で、とても大切な、大好きな作品なんです」。このデビュー作は、大幅な改稿を経て間もなく文庫化されるとのこと。十一月に書店に並ぶ予定の次の新作も楽しみです。

●表紙の井上館長の文章は、林美美子展関連イベントとして五月十七日に開かれた講演から抜粋しました。

曲軒作家生誕100年記念

このヘソ曲がり作家は何故、巨匠たちに、大衆に愛されたのだろうか？

聴く、観る

山本周五郎の世界展

「樞ノ木は残った」「赤ひげ診療譚」で知られる小説家・山本周五郎。放送されたラジオやテレビドラマなども紹介し、その素顔と作品世界に迫ります。

9月6日[土]～10月26日[日]

『黒い雨』

井伏 鱒二著



黒い雨
井伏 鱒二著
新潮社刊

小学校に上がったばかりの
或る日、担任の教師が私たち生
徒を図書館に連れて行った。

それが、私が図書館を見た初
めての日だった。自分の背丈よ
り高い棚の上まで並んだ書棚
は、少年の私には本の洞窟のよ
うに思えた。

「ここが本の海です」

教師は言って、読書は、本と
いう舟に乗って見知らぬ海へ
漕ぎ出すことであり、この本の
一冊一冊の中に素晴らしい世
界があると説明した。

その日から図書館への冒険
がはじまった。冒険は本を読む
こともあったが、それよりも、
どんな本が図書館にあるのだ
ろうかという興味もあった。私
は絵本や美術書に目がむいた。

そんな時、友だちの一人が恐
ろしい一冊の本を図書館の隅
の一角から発見した。その本の
頁を開いた時、冒険家気取りの
少年たち全員が唾を飲み込ん
で沈黙した。
それは写真集で、広島に原爆

が投下された直後からの被爆
者たちの惨禍を記録したも
のだった。そこに写し出された大
半の人々は、すでに健常の人の
姿を逸していた。顔や全身の皮
膚が焼けただれていいる人はま
だまっとうな方で、多くは人の
姿を失っている死体の記録で
あり、まるで石ころのように
累々たる死者が重なっている
写真の一枚一頁が私たち少年
の目前に迫ってきた。同じ歳に
思える火傷だらけの少年、少女
の何かを訴えるような目が
奥から消えなかった。

その日、仲間たちは皆、給食
が喉に通らなかった。授業が終
って、下校の道すがら眺めた水
をたたえた青田や白波走る瀬
戸の海、青く霞む中国山脈の、
のどかで平穏な風景が、一瞬の
内にあのような世界になるこ
とが信じられなかった。その写
真集を「恐れ本」と皆は呼んで、
仲間同士の手だめに使われ
たりした。私たちが最初、写真
集を見てショックを帯びたよ

うに仲間たちは、一様に動揺を
あらわし、その反応を見て喜ん
でいた。
しかし皆が皆、その写真集に
掲載されていた出来事を他人
事に思っていたのではない。広
島からさして離れていなかっ
た私たちの街にも被爆者は大
勢いた。原爆が投下された直後
から広島の方角
の空がずっと異
様な光彩を放っ
ていたことを大
人たちは記憶し
ていたし、数日後
に被爆者たちが
逃げ延びて街に
来た。その人たち
をこころない人
は、あれはピカに
逢うとるから近
寄ると感染して
死んでしまうぞ、
と言った。そんな
噂を知ってか、被
爆者たちの縁者
には沈黙して生

口のせいだった。主人公は何千、
何万の死者、半死者の中をさま
よいながら、きわめて日常的な
ものに目をむけ、ささやかな安
堵や微笑さえ感じられる描写
を折り込んでいく。同じ中国地
方で生まれ育った私には、その
日常が実にリアリティーがあ
り、近所にこういふ老人はいく
らでも居ると思っただけに
原爆の容赦しない惨禍が自分
たちの親、兄弟の身に起きてい
ても何の不思議はなかったと
思った。

きる人が多かった。
井伏 鱒二の『黒い雨』を読ん
だのは、高校生の時である。
図書館の冒険と書いたが、少
年の私が好きで読んだのはや
はり冒険小説がほとんどだっ
た。生家が海のそばにあったせ
いもあり、いつか自分も大海へ
漕ぎ出し、小説の主人公のよう
になる人が多かった。



に悪人を倒し、宝島を見つける
夢に焦がれていた。中学時代は
その反動か、魂が悩める小説を
好んだ。それが高校生になり、
少しずつ、社会の現実が自分の
身に迫り、読書することが遠の
いていた。

そんな折、哲学(倫理社会)
の先生から一冊の本を薦めら
れた。それが『黒い雨』だった。
「この本には君たちの隣人の
身に起ったことが記されてあ
ります。読まなくてはならない
本です」

その先生が、私の所属してい
た野球部の顧問であったこと
と、下宿先が生家の近くであつ
たため妙な親近感を覚えてい
たから、私は野球部の練習の後、
『黒い雨』を読みはじめた。

戦争が終って数年後、姪の結
婚に気を揉んでいる主人公の
独言で、物語は静かにはじま
った。結婚適齢期の、素直で美
しい姪の縁談が、彼女が原爆症で
はないかという噂で破談にな
ることが重なり、主人公の重松



は憤り、姪が被爆していない証
明をするために原爆投下の前
後の彼女の日記を読みはじめ
る。姪は原爆が落ちた時は爆心
地から離れた場所に居た。この

日記と並行するように重松は
彼自身の被爆体験を綴り出す
……。
重松の回想で物語は一気に
原爆のいまわしさを高校生
の私に突きつけた。悲惨な出来事
を見続ける行為は人に、或る種
の嫌悪感を与えて、あまりに悲
慘過ぎると人はそこから目を
背けるものだ。『黒い雨』を途
中で投げ出さなかったのは、読
まなくてはならない本、という
先生の言葉もあったが、それ以
上に主人公の朴訥とした語り

た。石原は斎藤茂吉らと共
にアララギの創刊にたずさ
わった歌人でもあり、石原
の自宅で発足した「アララ
ギ仙台歌会」の活動が、やが
て大正九年八月の文芸雑誌
『玄士』創刊に至る。一篤は、
この雑誌の編集発行を任さ
れていた。

戦争を言下に否定し、人間の
愚行を憤り、声高に何かを訴え
るのもひとつの小説の方法で
あるのが、『黒い雨』の真髄は、
ごく普通の人々の日常を通し
て戦争が問われている点にあ
る。井伏でなくては生まれな
かった作品である。
——あなたは井伏の『黒い雨』
を読みましたか？
そう問われて、頷くだけで何
かを共有できる小説である。
小説の海は、実に広大であつ
たのだ。



伊集院 静 (作家) 1950 (昭和25) 年、山
口県生まれ。91年『乳房』で吉川英治文
学新人賞、92年『受け月』で直木賞、94
年『機関車先生』で柴田錬三郎賞を受賞。
2002年、『ごろごろ』で吉川英治文学賞
受賞。自伝的長編三部作『海峡』『春雷』
『碑へ』など著書多数。

仙台文学館の展示品から



原阿佐緒はがき 三浦一篤宛
大正9年3月30日消印

原阿佐緒 はがき

田中 朋子 (仙台文学館学芸員)

原阿佐緒が自画像をした
ためた、一枚のはがきがあ
る。消印は大正九年三月三
十日。与謝野晶子に認めら
れて歌人として出た阿佐緒
は、この頃既に第二歌
集『白木槿』を刊行してい
た。受取人である三浦一篤
は、当時仙台日日新聞社の
記者で、友人たちと短歌雑
誌『アララギ』に投稿する
文学青年であった。文学を
志す、一篤ら仙台の若者の
求心力となったのが、阿佐
緒と、大正三年に東北帝国
大学理科大学教授として仙
台に着任した石原純であつ

た。十六歳の頃から日本画を
習い始め、宮城女学校で絵
画を教えた経験もつ阿佐
緒は、美人画などの他、こ
のように絵を描きつけたはが
きや手帳を残している。こ
のはがきにみられる "Yudo
Sato" とは、一篤と旧制仙台

一中時代からの文学仲間であ
る。『玄士』の同人でもある山
中登を指しており、当時の仲
間たちとの親しげな交流を
感じさせる。また、阿佐緒
が記した「Cちゃん(千秋)
Yちゃん(保美)のママさ
ん」のコメントや、千秋の
「母さんにしては美しく過
ぎます」という言葉が書か
れている。この頃千秋は十
二才、保美は五才。幼い時
に父と別れ、不在がちな母
の代わりに祖母・しげに養
育された千秋であるが、こ
の文面からは微笑ましい親
子の姿が浮び上がってく



原阿佐緒 1888 (明治21) 年~1969 (昭和44) 年
原阿佐緒記念館提供

「巴里の恋をめぐる」

パリ日記

さきほどから雨が降りだしてありますが、林芙美子という人はとても雨に縁のある作家です。戦死の誤報が招いた不幸を描いた『雨』。晩年の集大成『浮雲』の最後の場面でも主人公のゆき子が屋久島で一人寂しく死んでいくときも雨が降っておりました。芙美子の葬儀の日も雨。毎年の「林芙美子忌」もほとんどが雨でこえます。

さて、「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」で知られる『放浪記』がベストセラーとなった芙美子は、その印税で一九三二（昭和六）年十一月、芸術の都・憧れのパリへと旅立ちます。芙美子が二十七歳の時の、この半年間のパリ行きが、芙美子の生涯にとって大きなターニングポイントではなかったかと思われまします。芙美子はこの旅行を『巴里の日記』という題で単行本にしています。



林芙美子 1903(明治36)年～1951(昭和26)年 新宿歴史博物館提供

「その面影は／私が臉を閉ぢてゐると／優さしく私の手をとつて／白いリラの花陰を歩いてゐる。／バルビゾンのオテル・シャルメツツテの／古びた寝椅子に／その面影は何時かうたをうたひ／巴里の街裏で手をさしよせては亦／その面影は霞の音を聴いてゐる。」

バルビゾンのホテル・シャルメツツテで過ごした時の、白井の面影なのではないかと。

公刊されている『巴里の日記』では、「S」について、こんなふうにも書いています。

「私は日本の可哀想な私の家族を忘れることがどうしても出来ません。S氏よ、あなたはあなたの幸福輝くばかりの道があるでせうし、私には私の道があるのだらうと思ひます。……私を一人にしておいて下さい」

私はこれが林芙美子における白井晟一の結論だと思ふんですね。つまり芙美子は扶養しなければいけない家族を思つた時、白井への恋の可能性を断ち切らざるをえなかったと。

日記は、いわゆる物語として書かれています。一人で旅をして、いつも一人で寂しい寂しいと。そこで「S氏」と出会って恋に落ちるけれど、自分から恋に終わりを告げて日本に帰ってくるというのが『巴里の日記』のだいたいの流れなんです。

平成元年に夫の林緑敏さんが亡くなられて、ご遺族である芙美子の姪の福江さんが新宿区に芙美子の遺品をほとんど寄贈しています。その中には芙美子のフランス時代の自筆の日記もありました。芙美子がこの日記をもとにフィクション化したのが『巴里の日記』あるいは『巴里日記』という題の単行本なのです。

いままでの研究、あるいは芙美子の評伝はほとんどこの単行本『巴里の日記』に依拠してました。ところが今回の展示にもある『巴里の小遣ひ帳』とか自筆の『パリ日記』といった遺品が読み解かれるにおよんで、それがフィクションであったということがわかったんです。それがどうしたの？ と仰

ドラマチックな死

秋田県の秋の宮に「稲住温泉」という旅館があります。アーチ型の扉が非常にモダンな建物や離れが白井晟一の作品です。彼は自分の設計した建物に名前を付けることが多かったのですが、これが一九五二（昭和二十七年）年に完成すると、「浮雲」と名付けました。芙美子が亡くなった翌年です。それを私は、芙美子が最後に「浮雲」という作品を残して亡くなったことに対して、白井の哀悼の気持ちだっただけだと思ふんです。

「めし」という作品が芙美子の絶筆です。花の名前とかちよつと気取った題の多い芙美子の作品の中では「めし」という題名はとても特異なものです。「白井晟一の建築」という本の担当の編集者によれば、文章にも優れていた白井には「めし」という題のエッセイがあり、白井自身も「芙美子の『めし』は自分がつけた」と言っていたそうです。

こんなふうにして、二人のつながりは、なかなか深かったのじゃないかと思うのです。

フランス時代の白井晟一といつも一緒にいて、語学のできなかった芙美子の通訳を務めてくれた、大屋久寿雄さんという方がいました。先ほど、四月

のかもしれないが、私も研究者には、それがどのようにフィクション化されたかということに非常に興味があるわけなんです。

芙美子の「S氏」

『巴里の日記』には、「私」の恋人として「S氏」という人物が登場します。彼はいったい誰なんだろうということが研究者の間ですつと謎解きの話題になっていました。

私は自筆日記を丁寧に読み、調べた結果、「S氏」とは建築家の白井晟一ではないかと考えています。白井は後に日本芸術院賞等を受賞しており、また書家でもあります。

自筆日記に白井晟一の名前が初めて登場するのは一九三二（昭和七）年四月一日。「スフレーで大宅君と白井君に会い、クーボツクで……」とあります。白井晟一に関する資料は芙美子ではなくさん持ち帰ったはずなんです。パリ時代のものは一ひとつしかありません。クー

ボックというバーのロゴの入った便せんに白井晟一自身がベルリンでの住所を書いている。その一枚だけで、ほかにはありません。でも、なかったはずはないんです。

それに、芙美子の自筆日記は、四月二十五日から六月三十日までの部分が破り取られていたのです。その部分には、白井への恋情が連綿と書き綴られていたと思われまします。誰が破り取ったかを推理していただいてもおもしろいかもしれません。

芙美子が亡くなったのは一九五一（昭和二十）年ですが、亡くなった後、夫の緑敏さんが庭でずいぶんいろいろなものを燃らしたというのを姪の福江さんがご覧になっています。

「日記」の中では、四月十八日一日だけが空白です。翌日には「顔そむけたし」と書いていますし、翌々日の日記には「胸のたむおもひなり。Sのペルリンへ帰る日もあと数日、何も云はない。何も云へない。誰が悪いと云ふ事もない。皆い、のだから。」と書いてあり

一日の日記に名前が登場した方です。

芙美子が亡くなったとき、机の上には手紙の束がありました。その一通が大屋さんからのもので、パリを懐かしみ、「やはり僕の知っているあなたの声でしたよ」とあります。

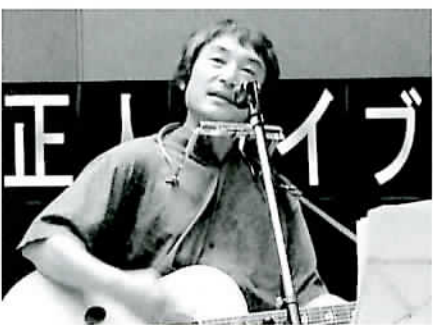
芙美子は一九五一（昭和二十六年）の六月二十八日に急逝しますけれど、その直前の二十四日にNHKの「若い女性の集まり」という放送番組で話しているんです。そのラジオの番組を

大屋さんが聴いて手紙を書いたんです。

芙美子にとってパリに行った二十歳というのにはまさに青春時代。いろいろな人に出会って、何もかも吸収していた時代。ドラマティックに言えば、もしかしたら大屋さんの手紙を読んだその夜に、芙美子が苦しんでいた亡くなったのかもしれない。まさに芙美子が生涯を終えようとする間際に、その手紙によって、はからずも芙美子の中には、パリ時代の白井晟一との

友部正人コンサート

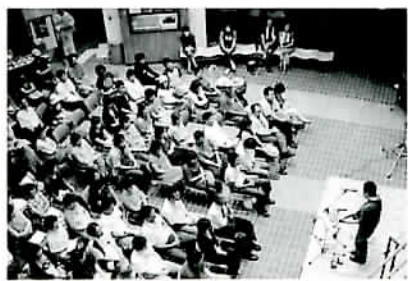
平成十五年八月八日 十四：〇〇
エントランスホール



「歌っていると庭で黄色い蝶が2匹、飛び交っていたり。いろんなものが見えて楽しかった」

「一人ひとりの聴衆の顔がよく見えて。20年来のファンも来てくれたよ」

友部正人（ともべ まさと）
1950年東京生まれ。高校卒業後名古屋の路上で歌い始める。72年「大阪へやってくる」でレコードデビュー。77年「おっせいは中央線に乗って」以来、詩集、エッセイ集も多数。ニューヨークにも部屋を持ち、日本と往たり来たりする暮らし。最新詩集『夜中の鳩』（2003年、思潮社）



思い出が呼び起こされたのではないのでしょうか。
※平成十五年四月十二日の講演の要旨をまとめたものです。



今川英子（昭学院短期大学教員）1950（昭和25）年、福岡県生まれ。日本女子大学国文学科卒業。同大学院修士課程修了。「林芙美子全集」（文泉堂）の編集に携わる。編著に『林芙美子放浪記アルバム』（芳賀書店）、『林芙美子「巴里の恋」』（中央公論新社）がある。



「放浪記」（改造社、1930年刊）新宿歴史博物館提供

今川英子

島崎藤村の手紙

— 弟子・権藤誠子が残した資料から

本多真紀（仙台文学館学芸員）

藤村に見込まれる

一九一六（大正五）年に撮影された、島崎藤村一家の写真がある。緑側に藤村と息子たちが座り、軒下に二人の女性が並んで立っている。一人は藤村の姪・こま子、そしてもう一人が、一時期藤村に師事していた権藤誠子である。当館には、この写真が貼られたアルバムや、藤村、田山花袋ら文学者の書簡・短冊など、誠子の手元に残された約七十五点の資料が、ご子息の吉田震太郎氏から寄託されている。なかでも、藤村が誠子にあてた書簡二十五通は、藤村の文学観や人間性が表れている。



1916（大正五）年の藤村一家 左から島崎こま子、権藤誠子、右端 藤村

興味深い資料である。これらはすでに藤村研究者の故・瀬沼茂樹が研究しているが（注）、改めて弟子・誠子との関わりから考察を試みたい。

誠子は一八八五（明治十八）年福岡に生まれ、上京して立教女学校などで勉学に励む傍ら、文学を愛好して自らも創作を試み、雑誌の懸賞小説に応募するようになる。そのうち誌上に掲載された誠子の文章を読んだ藤村から請われ、一九〇八（明治四十一）年頃に浅草新片町の藤村宅を訪ねた。誠子が死去する前年（一九七四年）に録音された回想テープによると、初対面の藤村は四角張らない、優しい先生という印象であったという。一方でどこことなく打ち解けない雰囲気もあったが、文学を志す誠子をよく指導してくれたと語っている。

書簡に表れた文学観

誠子に宛てた書簡のなかには、師としての藤村が、誠子にどのような指導をしていたの

かを示すものがある。

「（前略）今日は部屋を片付けたりなぞし、まして折々に拝見して置きました日記も取纏め一ト先づ別封にて御返しすることにします、斯うして正直に心の歴史を書いて見たといふことは後から考へて御覧に成ると一ト物をよく見るといふ上にも、物をよく記憶するといふ上にも、必ずタメになるだらうと思ひます、御作も拝見して見ましたが私には日記の方が充実したところが多く思はれました、強いところ考へて作の形に成さうとするよりも、今一年位はこのまゝで進んでいだけたく思つて居ります。（後略）」（一九〇九（明治四十二）年十二月一日）



藤村がフランスから誠子に送った絵葉書

日記を「正直な心の歴史」と捉え重視する姿勢は、藤村の文学に対する考え方をよく表しており、書き手はまず自己の内面を凝視する訓練をせよという藤村のポリシーがうかがわれる。「灯の方へ」は面白く拝見しました乾燥無味なる生活より音楽あり歌ある灯の方へ向ふ心は親しみのある筆にて書かれてあるがうれしく思はれます「親しみ」を失はないといふは何より味のあることです（後略）」（一九一三（大正二）年一月五日）

「灯の方へ」は誠子が創作した文章で、藤村に評を仰いだのだろう。残念ながら現存しない

細やかな気遣い

一九一三（大正二）年春にフランスへ渡った藤村は、滯仏の三年間に、十一通の国際郵便を誠子に出している。何気ない近況報告が記されたそれらの便りは、若い女性の趣味を意識してか、子どもの写真の絵葉書であったり、花とリボンがあしらわれたカードであったりした。西洋文化の香りが漂う師の手紙は、藤村の渡仏の理由や苦悩を知らずにいた誠子にとって、胸が躍るものだっただろう。瀬

沼は「なにげない藤村の誘惑術」と言っているが、誘惑の意図があったかどうかはともかく、相手を意識した絵葉書の選び方ひとつにも、藤村の細やかな気遣いが垣間見える。また、帰国後、頼んだ仕立物の礼のついでに「シャボン」一個到来物を差上げます 私の柄にないものがあるとところから貰ひ受けましたから皆さんの間に御分けします（一九一七（大正六）年十二月三十日）と書いているが、「私の柄にない」などと言いつつ、藤村の誘惑を付して物を贈るところに、藤村の懇懇な性格が表れている。

新生事件の影

一九一八（大正七）年五月、藤村は新聞に「新生」連載を開始。それにより誠子も藤村とこま子の事件を知るのだが、「新生」第一部完結後、藤村は次のように誠子に書き送っている。「（前略）この夏を熱い汗と冷い汗とを流しつつきました、愚かなる作物を発表し定めし心持を悪くせられたこと、思ひます唯生に徹して進みたいと思ふ心は自分をしてあゝいふ愚かなものを書かせました（中略）創作上のことで考へ苦しむこともありましたら田山兄（注・田山花袋）へなりと御相談の上御精進のほど祈上ます」（一九

一八（大正七）年十月二十七日）ここで自ら「愚かなる作物」と呼んだ小説「新生」は、「老獪な偽善者」という批判を生み、藤村の肉体的な評価に結び付けられることもある。だが、「唯生に徹して進みたいと思ふ心」が「新生」を書かせたというくだりは、かつて「正直な心の歴史」を重視した藤村の文学観に通じている。この言葉こそ、小説家・藤村の信念を明確に表したものであろう。

一人間には、そんな言葉も弁解じみて聞こえたに違いない。師に対し疑問と嫌悪感を抱いた誠子は、この手紙の後、十年間師事した藤村のもとを離れる。その後、結局誠子は文学の道へ進まずに社会主義思想と婦人運動に関わるが、そこからは文学への幻滅がいかに深かったかが想像できる。残された回想では、その辺りの事情には触れられていない。藤村との訣別は、誠子の心の傷となつて長く残つたのだろうか。

しかし、八十九歳で亡くなるまで書簡を散逸させずに持ち続け、「文章が書けるようになったのは藤村のおかげ」と語っていた誠子にとって、師・藤村は大きな存在だったのだろう。藤村の人間と文学へのアプローチのひととつともなるそれらの資料には、一弟子のさまざまな思いも秘められている。

（注）「島崎藤村未発表書簡（二十四通）―藤村と女弟子―」「国文学解釈と教材の研究」四巻十号、一九五九（昭和三十三年）八月

誠子宛ての藤村書簡 1918（大正7）年10月27日（新潮社刊）

文学のある風景

伊坂 幸太郎の書齋

ミステリー作家、伊坂幸太郎さんの「書齋」は街中のコーヒーショップのテーブルや、広瀬川の河原のベンチ。



霊屋下の自宅から歩いて5分ぐらいの広瀬河畔にて。「ここがお気に入りの場所。仙台は大都市なのに、中心部のすぐそばにこんな深谷のような風景があるなんて、本当に素晴らしい」

「自宅では気が散ってしまうんです。TVを眺めたり、マンガを手を取ったり……と」

行きつけは全国チェーンの「D」や「V」など。大勢の客の中に紛れることができるので、個人経営の店よりも気楽だ。2時間ぐらを一区切りにはシゴクする。

執筆を始めてしまえば、他の客の存在は気にならない。パソコンに向かっていても、隣の客が覗き込んでくるわけでもない。

「みんな、僕の何をどう見ているんでしょうね」



「紙にメモを取ったりすることもありますが、たいていはパソコンに向かってどんどん文章を打ち込んでいきます」



「ゴダールの映画について人が語る時、取り上げられる作品がいろいろあるように、僕も読む人によって、好みの作品がばらばらに分かれるような、幅の広い作家になりたいんです」



「小説、まだまだいけるじゃん！」※

「重カビエロ」（新潮社刊）

伊坂幸太郎（いさか・こうたろう）

1971年千葉県生まれ。東北大学法学部卒業。96年「悪党たちが目にしみる」でサントリミステリー大賞佳作。2000年「オーデュボン」で新潮ミステリー倶楽部賞を受賞し作家デビュー。「ラッシュライフ」「陽気なキャンピングが地球を回す」と、緻密な構成で読者の注目を集める一方、ミステリーの地平を拡張するような試みにも意欲的。「重カビエロ」で第129回（平成15年上半期）直木賞候補に。